

「子ども劇場」を担う母親の生活史 —わが子と共に探り出す自立への道—

小林平造*・藤 英子**・山下芳香***

A Life History of Mothers who support the Kagoshima Children's Playhouse Conference — Mother and Child Independence in Children's Playhouse Activities —

KOBAYASHI Heizo, HUJI Eiko, YAMASHITA Yoshika

キーワード：母親の自立、生活史、表現活動、子ども劇場、地域子ども組織

1. 本研究の意義と方法

1) 先行研究の要点

今日、国をあげて家庭教育や体験活動の重要性が指摘され、推進されている。それは教育基本法改正（2006年）で新たに盛り込まれた第10条（家庭教育）、第13条（学校、家庭、地域住民等の相互の連携協力）に典型的に示されている。同じく新設された第17条に基づいて作成された現下の「教育振興基本計画」では、それが「基本的方向」の第1番目の課題として位置づけられている。こうした動向をふまえた取り組みが、“大人の保護する対象としての子ども”という捉え方で進められる傾向には注意をする必要がある。

一方「子どもの権利条約」（1989年第44回国連総会決議、1994年日本国批准）の解釈においては、子どもの意見表明権、子どもの権利の日常的な保障、子どもの社会参加の保障などに関する理解を深めながら子どもとの相互関係を築く大人の役割が注目されてきた¹⁾。それを、世取山洋介は「子どもと大人との間の『新たな共同関係』」創出の課題として指摘している²⁾。そこでは既成の社会教育研究が子どもの成長発達にとっての地域の意義を明らかにして理論構築してきたことを評価したうえで、「子どもと大人との間に流れるべき人間関係の質に対する着目³⁾」の欠落を指摘し、「子どもと大人との間に流れるべき人間関係⁴⁾」は「子どもが人間として有して

* 元鹿児島大学教育学部 教授

** 鹿児島県子ども劇場協議会事務局長

*** 鹿児島大学教育学研究科平成22年3月修了

¹⁾ これについて、『月刊社会教育』（国土社、同編集委員会編）2006年6月号は「子どもの権利を創る一つぶやく子どもと向き合う大人」を特集して、同趣旨の指摘をしている。

いる主体性の保障に不可欠のものであるとの観点⁵⁾」が欠落させられていることを問題にしている(佐藤一子、増山均等への批判)。

この観点は、子ども劇場を担う母親の「わが子と共に探り出す自立への道」を探求してきた本研究報告者等の研究視点と共鳴しあっている。

2) 「子ども劇場」を担う母親への着目

鹿児島子ども劇場でそれぞれの地域に成立している単位の子どもの劇場(本研究ではそれを「K1子ども劇場」、「K2子ども劇場」としている)を支え、リーダー(運営委員長、事務局長、ブロック長など)として自己形成していく母親たちを捉えてみると、地域子ども文化運動を継続・発展させるための難しい課題を乗り越えていく過程のなかで、わが子のリアルな成長の姿に出会い、これに励まされ、自らのリーダーとしての資質を高めている場合が多い。それは、わが子に限られることなく、わが子を媒介にして劇場に集う子どもたちとの関わりのなかに成立している関係である。母親と彼女自身の子ども、そして子どもたち、その相互の関わりのなかに生まれる共同関係である。同時にあと一つ、取り組みに参加する母親どうしの共同関係である。

それらのことが、母親の自立への筋道に、いかなる意義を持っているのか鹿児島の子どもの劇場の事例を取り上げて、実証的に解明していくこととする。

同じ地域の母親たちの状況をみると、子育てで抱える自分の課題を、他の母親たちと率直に自由に語ることができずにいる場合が多い。それはわが子の発達障害や落ちこぼれなど問題を抱える母親の場合に、より深刻である。離婚など母親自身の問題の場合も同様である。例えば、パニック障害を抱えた子どもとその母親が地域集団からスポイルされることも少なくはない。これにつきることではないが、いま、多くの母親たちは「孤独」である。その一方では、子育てにおける価値観が競争の論理で占められている場合も少なくない。競争主義の子育ては、往々にして子どもの能力や可能性を一面化してとらえることが多い。子どもの多様な可能性を開花させる機会に乏しいのである。あと一つ、封建的な古い慣習が色濃く残る地域性にあって夫婦間のジェンダー問題が、夫の子育て参加を遅らせ、子育てをする母親を孤立化させている。こうした問題と対峙している母親たちの子ども劇場づくりである。その母親たちは、様々な手段や方法を駆使して必要な取り組みを生み出している。

今日、子育て後半を生きる日本の女性にとって、リアルで本格的な自立への道を探り当てる場が失われている場合が多いであろう。子育て期にある母親にとっては、その自立の模索において、わが子との関わりを抜きに考えていくことはできない。否むしろ、母親はわが子との関わりのなかでこそ、女性の自立への筋道を確立していくのではないか。本研究でとりあげた母親たちにはそのことが明らかである。そして、子どもは、そのような親の姿に学びながら、自らの青年期に向けた自立への道筋を思い描くのではないか。取り上げた母親たちの娘、息子から、そのこ

²⁾ ³⁾ ⁴⁾ ⁵⁾ 世取山洋介「子どもの権利条約からみた『地域』の意義—関係的子どもの権利論と社会教育の対話」同前掲『月刊社会教育』P13～16。

とが明らかである。

3) 本研究の方法と内容構成

ここでは、鹿児島子ども劇場の取り組みの全容を視野に入れた上で、「生活史」研究の手法を用いて、二人の母親を中心的なインフォーマントとし、母親の子どもたちへのヒアリングも含めた実証研究を行っている⁶⁾。K1子ども劇場(インフォーマントA)もK2子ども劇場(インフォーマントB)も旧鹿児島(平成の合併前)市内を12に分けた単位の劇場の一つであり、いずれも市街地区域にある。まず、子ども劇場が上演してきた演劇、人形劇、ティーンズアートフェスティバル(自己表現)などが、それぞれの自己形成にとっていかなる意味を持っていたのかを作品分析をふまえて検討する。次にそれをふまえて、二人の母親が子ども劇場のリーダーとなった時点から今日までの期間を主な対象として、二人と子どもたちと夫も視野に入れた分析を行う。最後に明らかになったことがらを理論的に吟味する。

2. 鹿児島県子ども劇場協議会と鹿児島市子ども劇場連絡会の組織の特徴

はじめり 鹿児島の地に『あたらしい子どもの文化』をつくりだそうと、鹿児島子ども劇場は、子どもの状況に危機感をもったお母さん達、青年たちが集まり、1972年12月17日に発足した。遊びまでテレビに影響される子どもの様子を驚いていた保母さんや、マンガやテレビばかりみているわが子に不安をもった人達だった。子どもは人間として育っていくのだろうか?生の舞台の感動体験が心を育くむのではないか?地域での異年齢集団による経験でたくましく豊かに育つのではないか?そんな思いが溢れての発足だった。「子どもに夢とたくましく豊かな創造性を!」のスローガンのもと、舞台芸術を年に4回程度、子どもの地域での自主的自治的な異年齢の集団づくりを基本としたキャンプやまつりなど観ることと自主的な地域での活動を2つの柱として活動しはじめた。鹿児島は、青年たちの力も大きかったこともあり、どちらかという自主的な子どもの活動に発足当時から力を入れてきた経緯がある。女性がわが子や地域の子どものために社会に働きかけていくことに偏見と差別が色濃くあり、鹿児島子ども劇場は、いつも会の担い手がしに苦労した。社会的な支援もほとんど無いなか、地域を這うように会員を広げ続けてきた歴史だった。

組織 子ども劇場は、4歳以上で大人も子どもも会費は同額となる。大人も子どもも会の主人公として権利を持つ。会費で年間の予算をつくりその月の会員数をベースとして舞台をみる内容や回数および活動の内容も検討され、会の基本は会員が3家族以上集まったサークルより代議員が選出された総会で決定する民主的な会である。地域を基礎にサークルが集まってブロック(小学校区を基本)となり、ブロックから1名の運営委員が選出されて会の運営委員会を構成する。運営委員会は総会で決定された課題や活動計画、予算、体制などによる執行機関である。また、

⁶⁾ この研究のヒアリングは、2007~2009年に実施し、7分冊のヒアリング記録として編集され、関連資料は1冊に編集されている(鹿児島大学教育学部、社会教育学研究室=小林平造研究室蔵)。

サークルを基本として委員が選出され、総会で決定できない決定事項については、委員会で決定する。

鹿児島市子ども劇場連絡会 鹿児島市は、現在地域に13の子ども劇場がある。1984年には2000名弱の会員で、広い範囲での運営が困難になってきたことと、地域に根ざした活動にしていくために、鹿児島市の子ども劇場を3分割独立した。同時に、高学年を中心とした鑑賞活動と中学生・高校生などの子どもの活動や運動交流および、行政に対する窓口として鹿児島市子ども劇場連絡会を設立した。K1もK2も分割を繰り返していく中で生まれた小学校区をいくつかかかえた鹿児島市内の地域の子どもの劇場である。鹿児島の劇場運動は、地域での活動を中心しているため各中学校区にひとつの子どもの劇場をめざしているという特徴をもつ。

また、鹿児島県連絡会は、鹿児島市が4つに分割独立し、県内に奄美、大口、川内、加世田と広がった中、県内すべての子ども達に子どもの文化が届くことを大きく目的に掲げて、1987年に発足した。その後、鹿児島県子ども芸術祭典がはじまり、離島を含む県内すべての子ども達に「生の舞台」を届けるには、子ども劇場がより力を出し合う必要性により、人もお金も保障し運動の推進力となる強い連帯をもつ県協議会へと92年に変更した。鹿児島県は九州の他県に比べて、劇場が県内になかなか広がらず、当初の10年間は、1県1劇場の時代が続いた。奄美で発足しても県内で交流もままならず、なかなか県内に広がりを見せることが困難だった。また、会のなかで育つ子ども達も中学生になるとやめてしまうために、会の中で育つ子どもの姿が見えない困難さがあった。

鹿児島の子ども活動 鹿児島市を3つに分割独立させたことにより、地域に根ざした活動が定着し始めた。その3年後、会員数が2000名を越え、高学年部（小学校4年生以上で思春期を中心とした子どものための舞台と活動の保障される組織）が設立される。ここから本格的な地域での子どもの自治による異年齢集団づくりが始まる。自給自足の屋久島キャンプを継続し、青年集団も100名を超え、高校生集団も誕生した。しかし90年代に入る頃、子どもの状況がますます厳しくなり、夏のキャンプすら会で決議できない劇場も増えて高校生・青年は壊滅状況になった。県組織のなかで10日間の「子ども村」を再度起こしていった。現在の14回目子ども村は、10数年かかって青年・高校生が指導員として子どもたちに関わる体制ができ、また、青年主体の子ども村への実現に近づいてきている。

子ども村とともに、この子どもの活動を県内に広げてきたのは、鹿児島県子ども芸術祭典10周年を記念して劇団とともに生み出した「高学年祭典」である。中学生・高校生の思春期を生きる子ども達へむけた体育館でもできる小規模の作品づくりを劇団へ依頼し、子ども劇場は、県内で30ステージの子ども達の手による公演開催を約束した。また、劇団の力を借りて観るだけでなく子ども達が舞台に上がり表現する活動「ティーンズアートフェスティバル」を隔年で行おうと計画した。2000年の第1回高学年祭典(思春期を中心とした親子に地域で舞台を保障する公演)で、各地の子ども実行委員による手作りの鑑賞の取り組みと2001年には、表現活動「ティーン

ズアートフェスティバル」を行った。演劇をみること、創ること、この両方を中学生・高校生の時期に地域で実践することで、子どもたちは、子ども集団をまとめるリーダー集団としての確かな力をつけてきた。

青年集団・運営集団・子ども集団へのかかわり 基本的に高学年部ができる、高学年の活動には、高学年部長として運営の責任者が子ども集団にも責任をもつことになる。また、現在青年もひとつのブロックとして地域とは違ったブロックの位置づけをし、いくつかのサークルをつくりその代表者が青年ブロック長として運営委員会に所属して会の運営を担うことになる。運営委員会に参加できないときには、運営委員長や事務局長もしくは、高学年部長から報告を聞き、全体の子どもの活動や青年の活動の相談をしていくことになる。青年がストップすると会全体がストップするため、高学年部長は、青年ブロックにも責任をもっている。また3年前から、地域（小学校区）を中心とした子どもの自治による集団としての団を発足させ、日常的に子どもが地域でつながりあう子どもの組織を創っている。そこには、団責任者がおり子どもの集団に責任を持ち、子どもは登録制としている。団総会を年に1回開いて子どもの自治集団をめざしている。団の責任者と指導員とが話し合って子どもの活動に寄り添っている。鹿児島市では、この団組織ができて飛躍的に子どもの集団づくりが充実し、中学生、高校生のつながりができ地域で育つ子ども達が見え始めてきた。

子ども劇場運動 子どもを取り巻く状況にあわせるのではなく、常に子どもに必要な活動は何かを基本に据えて活動を創り続けてきた鹿児島子ども劇場は、子どもの状況が厳しくなればなる程、原点に帰り、確かめ合いながら実践してきた。鹿児島子ども劇場の37年は、子どものもつ力を発見してきた歴史でもあった。

3. 感動を生む舞台鑑賞と子どもやおとなの自己形成

1) 子ども劇場の作品選びと舞台鑑賞の特徴

子ども劇場の作品は、企画のためのパンフレットを見て会員がアンケート（子どもも含む）を記入してサークルでも話し合い、総会で決定する。みんなで決めてみんなで観ることを基本としている。作品の内容は、プロによる子どものための日本児童・青少年演劇団協同組合・特定非営利法人日本青少年音楽芸能協会・全国専門人形劇団協議会に所属している団体の作品となっている。子ども劇場では、九州エリアの団体が参加しての企画説明会やフェスティバルの作品を見に行くなどして作品選びの情報を得る。会員減がつづくなかでは、九州全体でコースが組まれるように案の状態から数回の九州規模でのアンケート集計の結果も参考にし、会員の意見も取り入れながら、運営委員会で作って総会決定していく。作品の選び方は、劇場の運営を担っている人たちの力量が必要となる。子どもの状況にあわせて、単なるアンケートの集計結果や財政のみで作品を選ぶのではなく、どんな子どもを育てていきたいかという方針をもった選び方が求められる。たとえば、鹿児島市連絡会の今年の例会方針は、次の6視点となっている。

- 一. 平和と命の尊さを伝え、考えていく作品
- 一. 日本の伝統芸能を守り、次の世代へ伝える作品
- 一. 子どもたちが地球や世界の民族、環境など、社会に目を開くきっかけとなる作品
- 一. 子どもたちの表現活動につながる作品
- 一. 創造・想像の世界が広がり、楽しめる作品
- 一. 地元団体、個人など鹿児島の地域発の作品

子ども劇場が作品を鑑賞する場合、例会当日に鑑賞するだけでなく、事前の取り組みとして子どもたちも含めた様々なワークショップや役者との触れあいや作品に対する思いも聞いたりして期待をふくらませていくことを大切にしている。子ども達は、作品にちなんだ様々な遊び会をしたり、人形劇だと人形をつくったりもする。高学年になると平和のことなど、自分たちが学習する場も設ける。また、役者さんと当日ロビー交流したり、搬入や搬出を手伝い、舞台を中からみて役者と出会うことも貴重な体験となる。取り組みから事後の感想を出し合う会まで会員みんなで作り上げる豊かな取り組みをめざしている。

2) 舞台芸術による親と子の感動と変化・その質

初めてみる舞台芸術が生み出す感動 最初にみた作品の感動が、こんなに子どもの心に深く残っているのかと驚いたのが、Aの長男が幼稚園年長5才のとき、初めてみた祭典での「3にんのひょうげもん」の話である。現在18才の彼は、1回しかみていないこのお芝居のストーリーを、ほとんど覚えていて次のように語った。「ストーリーは自分的には、好きなストーリーで、結構覚えていて、まるめちゃんができの悪い魚で、好きな魚の女の子がいて、長老的な魚もいて、その長老から滝を登れば、竜になれるといわれて、川か海かが、涸れそうという話を聞いて、じゃあぼくが登るという話になって、まるめちゃんが奮起してという話で、途中ででっかい魚にあって、順番にその人たちに、最初は馬鹿にされたけど、滝の登り方を教えてもらって、最終的にすごい辛い目にあっているのだけれど、ひょうきんな性格は、そのままで、正直で、その魚に馬鹿にされたりとかするけど、滝を登るときも1回で成功しないで、何回か失敗してぼろぼろになった感じだったけど、それでも、こう、すごい白熱して真剣な場面だったのに、まるめちゃんがすっとんきょうなことばで、まぬけなことをいうからそこがおもしろかった。最終的に滝を登ることができて、雨を降らすことができて、そのへんで終わって、結局、その女の子も長老もまるめちゃんが竜になったというのはわからずじまいで、そこで終わって、自分は、あれっ、まるめちゃんってこのまま魚に戻らないのかなと思って、終わったような気がします。ストーリーがすごく好きだった。」と語った。舞台が、脳裏に強烈な印象となって焼き付いているために、主人公と自分が一体となり、みんなを助けるために小さな魚（自分の姿と重ねている）が頑張っている主人公の姿をここまで印象的に語るができるのではないかと思われる。この時期の子どもの舞台を見る目は、特別である。吸い込まれるような瞳は、多くのおとなの観客が驚くものである。子どものとぎすまされた感性と豊かな想像の力によって、主人公を通して心の中に舞台を見なが

らもうひとつの世界を創っている。どきどきわくわくしながら心が動くことで体ごと弾んでいる姿がどこの公演でも多く見受けられる舞台をみる子どもの風景である。また、彼は、観たときの印象をこう語っている。「まるめちゃんが主人公で中心で動いていて、劇が始まった後も、まぬけな主人公的な設定がされて、自分的にそういう主人公がすごい好きで、結構低学年の劇だったから、けっこう笑いが多くて、ずっと笑っていたような気がする。ずっと笑っていたということが印象に残っている」と。

18才の今になるまでに忘れ得ぬ記憶として残っていることに研究者集団は、驚きとともにおとなにはない5才の子どもの舞台を観る力と受け止める感性のやわらかさを発見した。

また、Bの3男も、本人からの聞き取りはないが、初めて観た祭典「なんなんなんでマン」で、くいつくようにしていた目の輝きに親がびっくりしている。

2人とも5才という子どもの発達段階で、想像の世界で遊ぶ時期に作品を観ている。また、その作品の中に入り込んでくいているようにみている姿が浮かぶ。「まるめちゃん」の主人公像と「なんでマン」の主人公像は、作品に共通した点がある。どちらも子どもが主人公である。そして、「まるめちゃん」は、できが悪くてすっとんきょうな性格をもっているし、なんでマンも5才の設定で、父親も兄もこの5才のなんで？なんで？と何でも聞く「なんでマン」に手を焼かれているという決しておとなの期待するいい子ではない。「なんでマン」は、夢のなかで冒険をして悪者をやっつけるんだけど、実は、夢から覚めたときは、おねしょをしている。子ども達は主人公の姿に共感したり、自分を観たり、でもまっすぐにいいと思ったことや敵とたたかう姿に憧れ応援する。また、自分が作品の主人公の世界に入りきってしまうのである。この時期の子ども達の「生の舞台」の見方には、おとなの想像をはるかに超えた感性が響きあい、それによって心の中に自分のもうひとつの世界を想像して遊ぶ力があると考えられる。

舞台に感動する子どもを発見した親の驚き Aさんも初めて観た舞台に「汗はとんでくるし、つばは飛んでくる。こんな舞台って初めて観たとすごく感動する。子どもたちも観るのがすきなんだなあとそこで思った。」と自分も感動するが、子どもの姿にも感動している。Bも、Bの三男が、「また観たい、次は、いつ観るの？」と何度もいうことや、目の輝きに驚いている。Bの三男が、その後も子ども劇場のチラシが幼稚園に入れられるとうれしそうにチラシを持って帰り、「これ子ども劇場だよな」と何度も聞く。Bは、「よほど、観たいのだなあ。こんなに観たがるなら、入ってみようかな」と思って入会している。また、Bは、子ども劇場で、入会してみた「MR. ZOO」でBの三男が、目を潤ませながら、「死んじゃったね。ちょっと涙が出た」とぼつりと言ったのを聞いたとき、「この子わかってるのだなあ」とそれがうれしいと語り、主人公に感情移入できている三男にびっくりする。Bは、「子どもが観る力があることがわかったので、いろいろ観て観たいと思う」と会員を継続し、1年生である我が子に、4年生以上を対象にした高学年例会の「うめこがふたり」も見せている。まだ、高学年作品は、難しくて観れないと思っているが、そのとき、Bの三男は、予想をはるかに上回る反応で、すごく感動して泣く。芝

居が終わっても、「うめこばあちゃんどうしたのだろう？」と心配している。感動して泣いているのを観て、1年生でも高学年の劇を観る力がある我が子に感動している。Bは、「行ってよかったと思う」と語っている。AもBも本人自身は、子どもほど感動はしていないが、本人より子どもの受け止める力に驚いている。聞き取りのなかでもAもB自身も生の舞台の感動は最初の舞台ぐらいであり出てこない。内容もほとんど覚えていない。親は、様々な舞台に触れるたびに自分とは違う隣にいる子どもの反応に驚いている。それは、我が子の目の輝きや体の動き（びよんびよん踊り出すような姿やじっと集中している姿、わくわくしている姿や涙する姿）など様々な舞台に反応（受け止め方）する我が子の力に驚きを持つ。そんな、子どもが感動している姿が親を変えていくのではないかと思われる。

子ども達自身が表現するティーンズアートフェスティバルー困難を乗り越えた子ども達の輝きに感動する親たちー Bは、ティーンズアートフェスティバルでのK2の4人の中学生・高校生の作品で初めて感動する。「200%の力を出してくれて、大感動のステージ。出演者4人の頑張りでおとなもすごく頑張れた。劇場をやめないで運営をやめないでいたから、この経験ができた。初めて自分の子じゃない他人の子にこれだけ心配したりして気持ちが寄せられた。あれほど、どきどきしながら感激したのは初めて」など。また、Aも初めて観た作品の次に感動の言葉が出てくるのがティーンズである。「子ども達のまばゆいばかりの輝きに感動する。Aの次女ら4人の中学生がこれまでの長いつきあいのつながりを土台にして、お互い尊重しあいながら、意見を出し合って創りあげていく姿に大きな宝物を子どもの心のなかに持ったと思う」と感動の言葉が出てくるのが、おとなは特にティーンズが多い。どんなすばらしいプロの作品より親たちは、思春期の子ども達の表現する舞台に涙する。子どもに寄り添い、励まし、落胆しながらも断崖絶壁に立たされて大きく成長した子どもの姿を見ているからである。また、身近な地域にいる難しい揺れ動く思春期を生きる普通の子どもの、作品を作り上げるまでのその集団の変化を目のあたりにするからである。そこには、育てようとするおとなの働きかけ、育とうとする思春期の子どもの深い葛藤の姿がある。人と人とがかかわりあいながら、何もない中から何かを生み出す、そんな力が子ども達にはあることが親たちを感動させている。何をしたいとひとりひとりが言葉にしなければできない。何故かできないことをやりたい、挑戦したいという子ども達。音楽も脚本も演技もダンスもすべて自分たちの力で作り上げる。自分の思春期の時代に誰も通ってこなかった表現への人と人との関係づくりのきびしさ楽しさ、辛さがここにある。部活や塾や試験と忙しい子ども達が自分の意志で作りに上げていく。なかなかすまない集団。ときには、おとなが先にキレたりする。でも、子ども達は、おとなには動じない。子ども達は、子ども達の集団で乗り越えていく。おとなはあくまでも寄り添うしかない。練習会場の準備や送り迎え、食事などを応援し、経過を見守るしかないのである。当日は、舞台上で照明を浴び、誰もが200%のもてる力を出し切る。輝く真摯なその時期の子どもの姿に感動するのである。ティーンズに出演したAの次女の14才の感想文がある。「わたしにとってティーンズとは、ズバリ“生きていく道”です。この

活動を通してたくさんの人に会ったし、友達もできた。最初は、劇場の人に頼まれて、ティーンズに参加することになって、半分は、自分の意志ではなかったけれど、集まりを重ねるにつれて、“やるんだったら、とことん楽しもう”と思って活動にとりくむようになりました。はじめに書きましたが、ティーンズは、“生きていく道”と思うのは、ティーンズに参加しなくても生きていけるけど、人とのコミュニケーションの取り方とか関わり方、何よりも相手のことを考えるようになるということが、私は、大切だと思ったから、ティーンズはズバリ、“生きていく道”です。取り組みでは、本当に心を許せるともだちが必要だと思いました。学校でもだちとけんかしたり、いらだったりしても、劇場のみんなといるときだけは、嫌なこととか、むかついていることを忘れられて、すごく楽しい時間を過ごすことができました。学校では、“きらわれたらいやだな”とか思ったりして、少し自分を隠していたりしていたけど、劇場では本当の自分でいられたような気がします。だから、素直な自分であるってことは、大切なことなんだから改めて気づきました。」

この時期の子ども達が、まるでさなぎから蝶に変容する姿を、子どもの表現活動であるティーンズアートフェスティバルの取り組みから当日まで半年の間に間近で見ることができる。それが、親たち大人達を感動させるのである。そして、また、この舞台を憧れの目でじっと見つめている小さな子どもたちもまたプロの舞台とは全く違う大きな感動を得ているのである。

母親Aの長男が語る舞台を観ることの意味 演劇をみることの意味については、Aの長男がはっきり語っている。「見続けてきて影響を受けていると思う。自分ではわからないが、観ないよりは、いろいろ考えさせられる。低学年の頃は楽しければよかった。高学年になると、ストーリーのしっかりこない劇もある。あえて考えさせるためにそういう演出をしているのではないかなと思う。終わりが中途半端な劇もある。そういうのをみたり、聞いて訴えかけているものがある。何を訴えているんだろう。観るだけでも意味があるけれど、たぶん、そのあとの感想会や交流などで、サークルで思ったことやもやもやしたものを何かしら言葉にできる。感じたことを言葉で表現できるようになった。話す場、感想をいう場、自分の思ったことを言葉にする力がついた。劇場では、ロビー交流会などで役者の裏話も聞けるし、実際自分の気になっていることを直接役者に聞ける。映画とは違って、役者として出てきて、役と本人との切り替わりがあるのが楽しい。生のものは失敗するのをみてにやったり、何回も観るのもすき。劇場に入っていないと、ティーンズでチケットを売ることもないし、中学生とかは人形劇をダサイと行って来てくれないけれど、自分はダサイと思わないし、観ないよりいろいろ考えさせられる」といっている。Aの長女も語っている。「最初は、友達に会うために観ていた。考えや表現の仕方、考え方が変わった。他の人と考え方が変わっていった。しゃべりたいことがことばに、心の中を外に出したいと広がってきた。狭い視野にとらわれない。作品に対する感動の仕方が変わってきた。」と答えている。幼稚園の頃から学童期にかけては、ストーリーにはまって、わくわくし、想像の世界が広がって遊びの内容まで（「準備完了第1号計画」を観た後、社宅で基地を創って遊んできたとい

う報告より) 変わってきている。高学年から思春期にかけては、世界観が広がり、人間や社会について深く考えるきっかけとなっている。観るだけでも意味はあるけど、受け止めたことを言葉にしていくのには、自分の意見を他人に話すことが必要だと語っている。Aの長男は、中学2年のとき高学年祭典「銀河鉄道之夜」で自分の地域で上演するステージの責任者となり、「当日感動した人(観客)などの意見を聞くことができ、大成功だったと思う」と述べている。この中学生の時期に劇団の人と対等に話をする。チケットを売る。実行委員会をまとめ、成功させる段取りをつくり、自分の地域の実行委員会を何度も持つ。市の会議に代表として数回参加し、クラルテまで代表団として参加し、県全体での集まりにも代表として参加する。また、2年後の高学年祭典「知覧・青春」では、高校1年で実行委員として関わっている。子ども劇場で高校生サークル会を定例化しようという時期にちょうどサークル会が毎月あり、そこで感想をしゃべる場が保障されている。彼は、高校生の時期に青年が退会し高校生として青年ブロック長としても頑張ってきている。青年ブロック長は、自分の劇場の会と同時に市全体の会も月に1回ある。県や市などの多くの高校生・青年・おとなの関わり合いから、そんな数多くの体験のなかでいやがおうもなく自分の考えを話す機会が増え、また、劇団としゃべる機会も増えている。そこで自分と他人との考えの違いを知り、多くのおとなとの出会いから、「自分のアイデンティティを早い時期に確立した」と本人が語っている。成長の節目を、地域で舞台を上演するという面倒で大変な活動を通して成長してきた姿がみえる。ただ、舞台を観るだけでなく、舞台を創り上げる活動のなかでの子どもどうしの話し合いやつながりあいが必要だと聞き取りから発見した。

舞台芸術が生む感動と子ども劇場活動 子ども達は、文化的な環境で確実に変化する。高学年組織をつくり、高学年例会を発達にそって保障し、中学生・高校生が中心になる高学年祭典で劇団とともに作品をつくり、チケットをつくり上演まで子ども実行委員会で行う活動と自分たちで舞台をつくる表現活動を隔年で保障して10年になる。Aの長男は、ちょうどその間の活動の保障から、こんなに語れる18才になっていることに活動の成果がはつきり出ている。おとなは、なかなか変化できにくいところにいるが、しかし、おとなも同じものを観て子ども時代を取り戻しながらストーリーに涙することは可能である。しかし、子どもの感性にはかなわない。子どもから多くのおとなが教えられ感動を受けて、子ども劇場は存続している。おとなもみずみずしい感性を取り戻しながら一緒に舞台をみて成長しあっていることがみえる。おとな自身も、価値観や人生観を舞台を観て、子どもに寄り添って成長する姿が見える。子どもに寄り添い、舞台芸術がきっかけとなって感動しあい、おとなも子どもも成長の節目となっている。

4. わが子と共に探り出す自立への道(1) -母親Aの分析-

母親Aは、47歳。長女21歳、長男20歳、二女16歳、47歳の夫と5人家族を持つ専業主婦である。Aは35歳で初めて子ども劇場に入会している。彼女にとっての転機は、41歳のときに、K1子ども劇場の運営委員長に就任して本格的な活動を展開したことにある。報告者集団が注目

資料1. 演劇、人形劇、ティーンズアートフェスティバルの内容と子ども

年代 パート	生の舞台鑑賞								舞台を鑑賞する背景	
	日時	題名	団体名	内容	主催・形式	年齢	子ども	おとなの感想		
A	1996.3	3人のひょうげもん	劇団道化	3人のひょうげもんというお芝居は、2つに分かれていて、一部は、身近な道具でぬぐいや野菜やほうきなど生活用品を使ってお話をつくったり、あそんだりするお話と第2部は、「竜になる」というまるめちゃんという小さなおさかなが主人公。池の水がひでりでなくなってきた、たきを登って竜になれば、雨が降ってみんながたすかるといふ。まるめちゃんは、ひとりでみんなに反対されながらも、竜をのぼっていく。このお話は、5回祭典から劇団道化が参加し、この3人のひょうげもんは、毎年毎年作品を作りながら、祭典でみんなの力で完成した思い入れのある作品。若い俳優が、真摯に作品の質をあげようと苦労して作った作品である。	第8回祭典		Aの長男(幼稚園年長) Aの長女(小2)	子ども達もよく覚えている。話も歌も覚えている。Aの長男は、5才のときにみたこの芝居のストーリーに感動し、内容をすべて正確に覚えている。小2のAの長女は、表現方法やセットに感心している。	汗やつばが飛んでくる。一生懸命な役者に感動。商業的な舞台しかみたことなかったのに、それとは違う、こんな舞台って初めてだった。子ども達もみるのがすきなんだあとそこで思った。	近所のお母さんから祭典に誘われる。K3子ども劇場が発足する前の年の祭典。夫の転勤で熊本から指宿へ転居。
A	1997	準備完了第一号計画	劇団風の子九州	体育館いっぱいのフロア全体と舞台が3方にあり、真ん中を役者が駆け回り、秘密基地であそぶ子ども集団のギャングエイジの冒険の物語。	指宿の発足例会		Aの長男(小1) Aの長女(小3)	Aの長女・・・もう一回みたい作品。秘密基地をつくるセットがうまくできていてあこがれた。かえってから社宅の植え込みにごきももらって秘密基地を作ってしまった。数ヶ月続いた。別世界の話とリンクしている。遠くから効果音がハデ。Aの長男もよく覚えている。		K3子ども劇場発足とともに事前にも参加して親子4人で入会。
B	2003.3	なんなんなんでマン	劇団風の子九州	子どもの頭の中は、なんで? どうして? でいっぱい。5歳のマークくんは、いつも何かあるたびになんで? なんで? って聞くので、あだ名を「なんでマン」とつけられました。そんなマークくんが、マントをはためかせて冒険の旅にでます。不思議博士とであつたり、バクーという怪獣と戦います。痛快で荒唐無稽の大活劇です。3人の役者が体育館の真ん中に作った200人ほどの観客席の前で動き回ります。	虹小学校区での祭典 みなみの祭典		Bの三男(幼稚園年長) Aの長女(小6)	初めてのお芝居に大喜びし、また、みたく、今度は、いつみるの? うれしそうにチラシを持って帰る、これ子ども劇場だね? を連発。見にくいものかと思っていたかも。Aの長女・・・一番印象に残った作品。役者さん自体にはまる。お友達感覚で7回観た。おっかきになって、せりふまで覚えた。	Bの三男の目の輝きに驚いたし、自分自身も楽しめた。	遊び会にさそわれるがあまり興味がなかったのていく気持ちにならない。
A	11	MR. ZOO	オールスタッフ / イッツフォーリーズ	ハートフルミュージカル。ゴミ捨て場で一人の男が落雷に会い、人形と会話を始めます。笑いを失ったおとこに人形の持ち主の姉妹が会い、人形と男と姉妹の不思議な交流が始まります。ZOOと名づけられた男は、姉妹にヒップホップを教えられ笑顔を取り戻します。心の底から熱くなるエネルギッシュなミュージカルです。	合同例会		Aの長女(中1) Aの長男(小5)	お父さん、死んじゃったんだね。ちょっと涙がでた。とほつり。 Aの長女(中1) 劇で初めて泣いた。車のなかで泣きながら親子で語った。とがった中学生の割には、素直に劇をみた。 Aの長男(小5) ストーリーを全部詳しく覚えている。感動したけど涙はでない。はじめてホールでみた。	主人公に感情移入できてるBの三男にびっくり。子どもの芝居と思っていたので、作品の質の高さに驚いた。自分も次の例会が楽しみになる。 A・・・Aの次女がダンスで参加したので感動した。	B・・・役員のしごとが一段落したので、Bの三男がこんなに見たがんだら、入ってみようかな? *A・・・このミュージカルは、最後が子どもたちが事前にダンスを練習して最後舞台で役者達と一緒に踊るスタイルとなっている。

イベント	生の舞台鑑賞								舞台を鑑賞する背景
	日時	題名	団体名	内容	主催・形式	年齢	子ども	おとなの感想	
B	2004.5	きかんしゃ1414	人形劇団クラルテ	本物そっくりの2Mもある機関車が舞台を走り回る大型人形劇です。61年間働き続けたきかんしゃ1414が機関士の協力でこっそり一晩だけ夜の旅に出かけます。妹の病気を治す星の花をさがす少年と出会い、その子に乗せて花を探すため水の原っぱを突っ走ります。きかんしゃと人間との夢多き友情が感動を呼びます。機関車の声は生でバリトン歌手が歌い語り、心に染み入る作品となっています。	合同例会	Bの三男(小1)	お父さん寝てたよ。面白かったのに馬鹿だね。		
B	2006.1	ウメコがふたり	東京芸術座	安藤美紀夫の原作をさねとうあきらが脚本にした、子どもたちの戦記です。日中戦争たけなわのころの路地裏であはだといわれ悪ガキでべそに、いじめられ「学校ずる休みするようなやつは、お国のためにならん国賊や!」といわれ、そこにあやしげな見知らぬ老人ウメコという老婆が現れて、ひとりぼっちのうめこと一緒に暮らし始める。忘れられない「きのう」の出来事を今の子どもたちに伝えます。	高学年例会		大感動して泣く。うめこばあちゃんを心配してた。	初めての高学年作品。会場の雰囲気とすばらしい作品に感動する。Bの三男が高学年の作品を観られるか不安だった。観る力があることがすごくうれしい。	
A・B	2007.2	銀河鉄道の夜	人形劇団クラルテ	宮沢賢治の作品を人形劇で表現しています。5名の役者でシンプルな紙を使つての表現方法は、想像力がどこまでも広がり、体育館の天井に飛ぶ鳥の影を移したり、観客のまわりを星座がきらめいて会場に入ったとたんに、宇宙空間のなかに入ったようです。本当の友だちって? 本当の幸せって? 人は死んだらどこに行くの? 主人公ジョバンニの悲しみや心の揺れとともに感じる作品です。	高学年祭典	Bの三男(小3) Aの長男(中学生実行委員)	なんとなくわかった。また、みたい。		
B	11	ティーンズアートフェスティバル	会員の13~19歳の子どもたち	各劇場の子どもたちが自分たちの表現したいものを半年かけて取り組みます。虹ははじめての参加でお手玉やジャグリングなどを3人の中学生と高校生4人で表現しました。ほかは、舞台劇、時代劇、ダンス、タップなどがありました。	高学年祭典・自主例会	Bの三男(小4)	K2子ども劇場の4人に感激する。でも、アンダーソンが一番好きらしい。自分ではないという。	悩みながら取り組んで最後までがんばられた4人ところが本番で成功。あれほど、どきどきしながら感激したのは初めて。	
B	2008.11	森は生きている	劇団仲間	1959年の初演以来、年末年始を初めとして40年余り、仲間の代表作品として上演されつづけている舞台です。マルシャークの12の月の物語が原題で、音楽林光をはじめとして、舞台装置、衣装、美術など40名のキャストで繰り広げられる詩情溢れる舞台は、親子3世代にわたって日本中の子どもたちを魅了し感動を与えています。	例会	Bの三男(小5)			夫が入会

したのは、ごく普通の母親が、それ以後K1子ども劇場の発展を支えていくことで、女性としての確かな自立への道を歩き始めたことである。そして、その自立への道は、彼女と共にK1子ども劇場の活動を進める3人の子どもたちとの深い関わりの中にあったという点である⁷⁾。

その際、母親Aにとっては、一つの大きな困難があった。ジェンダー問題(性差別)を夫と

の関係に持っていたことである。

ここでは、母親AがK1子ども劇場の中心メンバーとして参加していくことで、その自立への歩みを獲得していった経緯を、分析的に紹介していく。

それらは、大きく3つの点にまとめて説明できる。1点目は、母親Aが子ども劇場の運営委員長になって出会う困難を乗り越えるなかで、自らリーダーとして自己形成していくことである。

母親Aは、最初に子ども劇場に入会した鹿児島市から50kmのところにある市から、現在住んでいる市に、夫の転勤のため38歳で転居している。しかし、母親Aら親子4人は、K1子ども劇場に移るまで、2年9か月、1時間かけて以前住んでいた地域の子どもの劇場の例会に通い続けた。そして、長女が中学生になって長女の友人から、K1子ども劇場の高学年祭典と一緒に観ようと誘われたのをきっかけに、41歳で母親Aら4人はK1子ども劇場に移った。

そして4か月後、母親Aは姉の知人のK1子ども劇場の運営委員であるIさんに呼び出され、K1子ども劇場の運営委員長をやってくれないかと言われる。母親Aは、「運営委員長ってなんですか。」と聞くと、同席していたK1子ども劇場の事務局長であるJさんに、「私が全部しゃべるから、Aさんは横でウンウンとうなずいていたらいいのよ。」と言われ、「楽なポジションだったらいいです。」と軽い気持ちで引き受ける。そして母親Aにとって最初の運営委員長としての困難に出会う。

これまで母親Aは、20歳で短大卒業後、幼稚園教諭として2箇所の幼稚園で働き、25歳で結婚、専業主婦となっている。子ども劇場で何らかの役割を担った経験はなく、また専業主婦だったために、社会参加や社会参画の経験はあまりなかった。単位の子どもの劇場の運営委員長と事務局長は毎月、市の連絡協議会（以下、「市連」）に出会しなければならない。母親Aは、第1回市連の会場に入ったときの重い空気と市連の役員らの鋭く感じられる目がこわくてこわくてたまらない。そして母親Aは、運営委員長としての発言を求められても、Jさんに「これを言えばいいから。」と教えてもらったことを言っているだけだった。自分が何か言ったときに向けられる役員らの鋭い目に、「何か悪いことをいったかな。」とってしまう。自分に経験がない母親Aは、自分の発言に自信が持てない。そんな状態のために、母親Aは毎月の市連の日になると登校拒否の状態のようにお腹が痛くなるようになってしまう。また母親Aは、運営委員長として初めてK1子ども劇場の冬のキャンプに参加する。母親Aはそれまでに子ども劇場のキャンプの参加経験はない。母親Aはこれまで青年とふれあう体験や経験は乏しく、K1子ども劇場の青年らとも、サークル会で顔を合わせていたが、青年らに上から見られているような気がして何もしゃべれない。

しかし、これらの困難を母親Aは運営委員長としての取り組みの中で克服していく。冬のキャ

⁷⁾ 以下、K1子ども劇場の母A、K2子ども劇場の母Bを取り上げるが、いずれも単位子ども劇場である。そこで、単位子ども劇場の一般的な組織と活動内容について理解するために、論文末に「資料2. 単位子ども劇場K1の組織と活動」を紹介しておくこととする。

ンプでは、最初何もしゃべれなかった母親Aであるが、このキャンプで母親Aは、青年Mや青年Lに雪をぶつけられたり、雪に埋められたりする。母親Aにとって、こんな風に青年らとじゃれあうような体験は初めてだった。母親Aは、それがとても楽しかったと言っている。そして気がついたときは青年らと話ができるようになり、またそれが楽しい。キャンプに参画し、青年たちとも同じ体験をし、つながりを作れた。そして、この体験により母親Aは、「子ども劇場ってなんか楽しいところかもしれない。」と思うようになったと言っている。そしてその半年後に母親Aは、再び2年目の運営委員長を引き受けている。母親Aは「2年目の運営委員長は降りようとは思わなかった。思い出すのは楽しいことばかりで、つらい事があっても、楽しい事が先だった。みんなが大変な思いをしているのに、私だけ楽になることはできない。」と言っている。また、母親Aは、「市連は、緊張と苦痛はとれた。Jさんに聞かなくても自分の意見を言えるようになった。市連の中に顔見知りが増えて安心感が生まれた。」と言っている。母親Aは、1年目にK1子ども劇場の活動に全部出たおかげで、2年目は先が見えた。母親Aが運営委員長としての困難を乗り越える中で、自分がこうしたいと考えられるようになり、運営委員長を担うことへの自信が生まれている。

2点目は、母親Aは子ども劇場の運営委員長を担い続ける中で、わが子たちの子ども劇場の活動の中での成長そして自分が関わり続けるK1子ども劇場の青年たちの姿を目の当たりにすることで、リーダーとして子ども劇場を担い続ける自分もまた成長してきたことである。

長男は中学生になり反抗期に入り、家では全く口をきかない状態になる。しかし長男はK1子ども劇場の高学年部長であるIさんやJさんに、学校のこと、家族のこと、そして自分の本音をなんでも話した。長男のほうでも、直接母親Aに話すとショックを受けるような過激な気持ちでも、IさんやJさんに話すと、二人は母親Aに言う必要のないことは話さないだろうし、話してほしいことはうまく話してくれるだろうという信頼が二人に対してあったと言っている。だから、母親Aは長男と直接話さなくても、長男の様子はIさんやJさんから聞けるし、危機感をおぼえなかった。また、長男は、K1子ども劇場の青年Lをキャンプなど活動を通して慕っており、Lにも家や家族の不満やイライラをぶつけていた。同年代だと相談しても、共感はできても同じイライラを抱えているので、「不幸比べ」になってしまうと長男は言っているが、Lは年上で長男の気持ちに共感してくれ、反抗期を経験してきているので、Lに話すと長男はストレス発散になったという。母親Aは、長男や自分のまわりの大人の存在や青年の存在が子ども劇場にあるということが、長男の反抗期の危機を乗り越えさせてくれたと思っている。長女は県外の短大に進学していくときに「劇場ってありがたいこと山の如しです。・・・劇場が好きだから、苦しくてもみんなも一緒に頑張ってると思うと苦しいものも苦しくなくなる気がします。劇場は私の視野を広げてくれました。・・・話し合うとちょっと自分が大きくなったような気がするのです。心が切磋琢磨しあっている感じです。・・・」と書いた。また、長男は青年ブロック長になり「サークル会でみんなに会えること、そして話ができること、そしてそれをみんなが楽しみにしてくれてい

ることがうれしい」と書いている。そして、母親Aはそんな長男が、いろいろな人と楽しんだり、苦しんだりとても生き生きして見える。また、二女はティーンズアートフェスティバルに出演し、そのまとめ集の中で、「ティーンズは、私にとって“生きていくための道”です。・・・人とのコミュニケーションのとりかたとか、関わり方、なにより相手のことを考えるということが私は大切だと思った。」と書いている。

また、K1子ども劇場の10日間キャンプに運営委員長として初めて参加した母親Aは、子育てをしたことのない青年らが、子どもたちのことを考え、子どもの気持ちがわかるという姿に感動し、そのひたむきさに涙が出たと述べている。

そして母親Aは43歳で3年目の運営委員長を引き受ける。その時の総会資料の中で、佐世保の小学校6年生による殺人事件についてふれ、「自分たちのまわりにそういう事件を起こさせないためのひとつの活動として、子ども劇場の活動がある。子ども劇場の活動は仲間作りをし、自主性・社会性を身につけ、子どもを見守る大人集団をつくり、つながっていくというすばらしい活動だ」と述べている。運営委員長として困難を克服し、わが子や青年の成長を見てきた母親Aが、社会で起こった事件を自分たちの問題としてとらえ、その解決のために自分の子ども劇場の体験がその解決のヒントの一つになることを述べているが、それは母親A自身の体験から出た確かな自信が感じられ、彼女自身の成長もまたここで見てとれる。

そして3点目に、夫婦のジェンダー問題にぶつかる中で、母親Aと長女は、それぞれ子ども劇場の課題を乗り越える中での成長によって、ジェンダー問題にも解決の糸口を探していこうとすることである。

子ども劇場の担い手として成長してきた母親Aは、子ども劇場の運営委員長として取り組みを進める中で、夫婦間のジェンダー問題にぶつかっている。その経緯は以下に記す。母親Aら親子4人は、子ども劇場の活動をそれぞれ例会、自主活動、サークル会と楽しみ、母親Aは運営委員長なので、夜夫が帰宅したときに不在ということもあり、夕食の準備が間に合わないこともあった。そんな時、青年サークル会が長引き、高校生の長女の帰宅が夜11時半になり、夫が「今、何時だと思っているんだ。そんな遅くまでやるようなところはやめろ。」と怒り出し、母親Aとの間で言い争いが起きる。夫の怒りは、長女を子ども劇場の活動に巻きこんだと母親Aにむかっていき、「劇場ばかりしているから家は空け気味だし、ご飯を作っていない日もある。ありえない。」「この家を見てみろ。人が住んでいるような家じゃない。劇場と家とどっちが大事なんだ。」と言われる。母親Aは「両方とも大事だし、両方とも一番、どっちとつけられない。」と言う。長女は、「私を作ったりするからいいじゃん」と言うが、夫は「それはお前の仕事じゃない、お母さんの仕事だ。それがちゃんとできないのだったら、もうやめてほしい。」と言う。これまでの母親Aだったら、夫に何も言い返せずに泣いてしまったが、この日は泣かなかった。母親Aは、「泣けない、ここで黙っていたら絶対後悔すると思った。」と言っている。これまでの運営委員長としていろいろな課題を乗り越え、わが子のその中で成長する姿を実感できていた母親

Aは、子ども劇場の活動がわが子たちに必要だということを夫に話す。母親Aは今までの自分と違って「自分が言いたいこと、思っていることを言える自分ってすごい。輝いていると思った。」と述べている。自分の運営委員長としての課題を乗り越えてきた体験が自分の自信となり、自分の考えとして表現できるという明らかに以前の自分との変化を認識している。また、母親Aと夫が言い争っている5時間の間、長女はずっとそこに座っていて夫に対して、「お母さんが好きなことを奪わないで、なんでお母さんのやっていることを認めてあげないの。」と言った。この長女の言葉で言い争いは終わった。しかし夫は「百歩譲って何も言わないんだ。本当はすぐにでもやめてほしい。明日にでもやめてほしい。」と言った。ここでも長女は、子ども劇場の活動を経験するなかで、親に対して自分の考えを自分の言葉で言うことができるという長女の成長が見て取れ、それを母親Aが実感できた場面である。

夫との言い争い後、母親Aは夜遅くなる時は夕食を作って手紙を添えて出かけるようになった。また、夫は長女が短大を卒業して自宅に帰ってきてからは長女が食事を作っても文句を言わなくなった。そして、忙しいときのごみ出しや、自分の洗濯物を洗濯機に持っていくなど、先の言い争い以前はやらなかったことをやるようになるなど変化は見られる。

しかし、子ども劇場の活動については、二女がティーンズアートフェスティバルに出演するので夫に観に来るように長女が誘ったが、夫は「劇場はきらいだから行かない。」と来なかった。まだ、夫の子ども劇場に対する理解はすすんでいるとは言えない。

そして、このように子ども劇場のリーダーを担うことの困難を克服してきた母親Aは、44歳になった時に、体調の悪いJさんに代わり事務局長を引き受けている。それは、運営委員長として取り組みの中でわが子や青年のリアルな成長の姿の発見を通して自らも課題を克服し成長してきた。それらの体験が自信となっているからである。

そして、子ども劇場の運営委員長を担うまで、社会参加、社会参画の経験があまりなかった母親Aだが、運営委員長3年目に、また、鹿児島医療生活協同組合の理事を担い、現在までその役割を担い続けている。これもまた母親Aの自立への歩みの一つと言えよう。

以上のように、母親Aは3人の子どもたちと共に女性としての自立への歩みを獲得している。

しかし、彼女にとって、夫との間にあるジェンダー問題（性差別）の克服の課題は、大きな困難として自覚されている。但し、先の整理にも示した通り、夫として、妻として双方が少なからぬ歩み寄りを進める努力を生み出していくことが、少しずつではあるが先々への見通しをうみだしつつあることは把握された。

5. わが子と共に探り出す自立への道（2）—母親Bの分析—

母親Bは45歳。長男22歳、次男19歳、三男12歳。48歳の夫と5人家族の専業主婦である。Bは、38歳で初めて子ども劇場に入会している。彼女にとっての転機は、39歳のときに、K2子ども劇場の運営委員であるブロック長（4小学校区に1人ずつ）に就任して子ども劇場の活動を展開したことにあった。報告者集団が目にしたのは、ごく普通の母親が、K2子ども劇場の担

表1 K1子ども劇場 母Aと子どもの生活史(1994. 4～現在) 抜粋

Aさん親子		1996.5	2003.5	2003.7	2003.12	2004.7	2005.秋	2006.6	2006.夏	2007.6	2007.11	2009.11
K1子ども劇場活動と家庭	母と子どもをめぐりての出来事	祭典「三人のひょうげもん」に誘われ、子ども三人と観に行く	運営委員長になってくれと言われ軽い気持ちで引受ける。	初めての市連の会議(市連は試練の始まり)	初めて冬のキャンプに参加する	反抗期でも、子供の様子がわかり、家でぜんぜんしゃべらなくても、危機感を覚えなかった。	A家でバトル発生	事務局長になる	第1回みなみ村	長男青年ブロック長になる	ティーンズアートフェスティバルに二女出演、長男実行委員	ティーンズアートフェスティバルに二女出演、長男裏方
	例会・祭典・自主活動注)	「三人のひょうげもん」										ティーンズアートフェスティバル
	K1子ども劇場の運営				冬のキャンプ				K1劇場最高会員数を達成	第1回K1村	中学生4人が出演	
	出会った人たち	演じる役者さん	Iさん、Jさん	市連の会長や事務局長	青年M・L	Iさん				青年Lら6人の指導員		
子ども	Aの長女	子どもたちもよく覚えている。			強制的に参加させられるが楽しむ							父に二女が出演するので観に来てくれと誘う
	Aの長男	話も覚えているし、歌も覚えている。			強制的に参加させられるが楽しむ	私が知らないこともIさんにしゃべっている。				とても生き生きしている。	実行委員をする。本番はみんな上達していて、感極まる。	青年ブロック長として裏方で出演を支える
	Aの二女				強制的に参加させられるが楽しむ				初リーダー		ティーンズは、「生きていくための道」だと思う。	
母A		汗は飛んでくるは、つばは飛んでくる。こんな舞台で初めて観た。子どもたちも観るのが好きなんだとそこで思った。	運営委員長をやってくれと言われて、Jさんに「わたしが全部しゃべるから、Aさんは横でウンって、全部わたしがしゃべるから。」と言われて、わたくしから引受けたい。本当に軽い気持ちで引受けたい。	市連の役員の人たちの視線がこわい。Jが「大丈夫、これを言えよ。」という。市連の日は、登校拒否のようにお腹が痛くなる。	MとかLに雪をバーンとぶつけられて、雪に埋められて、気がついたときには、青年たちと結構話ができて、雪が溶けてきた。私以外にしゃべる大人がいたという。子ども劇場って楽しいところかもしれない。	反抗期でも、子供の様子がわかり、危機感を覚えなかった。ぜんぜん悩まなかった。私以外にしゃべる大人がいたという。子ども劇場って楽しいところかもしれない。	長女がサークル会から帰りが遅くなり、11時30分に帰ってきた。夫が「今何時だ」と思っているんだ」とバトルになる。夫は、「劇場とうちとどっちが大事なんだ。」と言う。いままでの私だったら、夫からいろいろいわれたら、何も言えなくて、泣く人だったのだけど、ここで黙っていたら絶対後悔すると思って、ワーツと自分が言いたいことをすこい勢いで言った。言えるわと思った。	今まで事務局長だったJが体調を崩したので、事務局長を引き継ぐ。地域に根ざす劇場運動を青年たちと広げたいと思う。	青年たちの姿に、この人たちが感動する。二女から4人の中学生がこれまでの長い付き合いのつながりを土台にして、お互い尊重しながら、意見を出しあって創り上げていく姿に、大きな宝物を子どもたちの心の中に持ったと思う。	二女が出演するし、劇場に触れるいい機会だと思えば、長女からティーンズフェスティバルに夫を誘ってもらう。		
夫							「百歩譲って何も言わないんだ。本当は劇場をすぐにもやめてほしい。明日にでもやめてほしい。」					「劇場はきらい。」と言って見に来なかった。

注) 例会・祭典は、演劇、人形劇、コンサート等である。例会は会員のみでの定期的な鑑賞活動であり、祭典は、会員が中心となり地域に広げるため誰でも鑑賞できる子どもの文化による地域づくりの活動である。自主活動は、「あそび会」とキャンプ等である。

い手となり、取り組みの困難を一つずつ乗り越えていくことでリーダーとしての資質を高めながら、自立への道を歩き始めたことである。そしてその自立への道は、彼女と共にK2子ども劇場の活動を進める三男との深い関わりの中にあったという点である。また、母親Bには一つの困難があった。それは夫との間にジェンダー問題（性差別）を持っていたことである。

わが子を成長させる子ども劇場 これを分析的に紹介していこう。母親BをK2子ども劇場の会員とし、後にはリーダーにまでなる方向を導いたものは、子ども劇場に共に参加した三男の豊かな感性の発見であり、一方では、子ども劇場の自主活動で子どもたちと共に参加できずに躊躇している弱さの発見であった。豊かさはさらに伸ばしてあげたいと考えたし、人間関係づくりにおける弱点は克服させてあげたいと考えたのである。

三男と初めて観た演劇は「なんなんなんでマン」であったが、その時の「食いつくようにして観ていた三男の目が忘れられない」という。それは何にでも興味を持ち聴きたがる「なんでマン」が、不思議博士に会い、夢を食べてしまう悪い怪獣を退治する冒険旅行、痛快で荒唐無稽な大活劇である。多くの子どもたちは、その痛快に展開する冒険や主人公の正義感に共感している。高学年向け作品の『うめこがふたり』は、戦争のいきさつから人の命や平和の尊さを考えさせる作品であるが、小学校1年の三男はうめこばあちゃんに深く共感して泣いていたという。それは鋭い感性で作品内容に共感することのできる三男の感性の豊かさを示している。母親はその息子の感性の豊かさを感動的に発見している。三男は、「また観たい、いつあるの、いつあるの、」と問いかけ、観劇の機会を心待ちにするようになったという。ならば何度でも見せてあげようと思ったのである。

こうした息子の鋭い感性の発見は、母親BがK1子ども劇場に参加しリーダーとしてその担い手になっていった大きな要因になっている。

三男の人間関係づくりにおける弱点は、母親Bには次のように見えている。ある時「光る泥だんごづくり」の“遊び会”に初めて参加している。そこで母親は予想外に面白いだんごづくりを経験している。しかし三男の方はうまく作れずにへこんでしまう。他の子どもたちとも馴染めずに面白くなかった様子であると。また、大人から青年、子供まで多様な世代の仲間が集って遊ぶ「わくわくワンダーランド」では、ビニール袋に水を詰めて作る水爆弾遊びに参加することができずに傍で見ているだけの三男である。6年生になって初リーダーとなったキャンプでは、火焚きができずにへこんでいる三男がいる。これらの体験は、母親に息子の弱点として認識されている。他者との関係に躊躇せずに自主活動を楽しむ三男に成長させてやりたいと思ったのである。子ども劇場は、母親Bに、そうした成長を保障できる場として受け止められたのである。

子ども劇場活動の困難を乗り越えて成長する母、そしてわが子 母親Bが子ども劇場の担い手としていろいろな困難に出会う中で、リーダーを担いきることが出来たのは、三男と自分の変化との連鎖の発見があったことである。

ブロック長を引き受けた母親Bは、初めての運営委員会の中で話されている内容の意味がわ

からず、とんでもないものを引き受けたととても後悔する。また、もともと大嫌いなキャンプに初めて参加するも、細かいいきまりがたくさんあって、「なんじゃこのキャンプ」と二度と行きたくないと思う。それでも次年度には低学年部長を引き受けるが、体調を崩してしまう。体調が悪いのに事務局長をして欲しくないかと打診され、再びしぶしぶブロック長を引き受ける。そしてその1年後には運営委員長を引き受けるのである。このときの事務局長は、自分が前年度事務局長を断ったため事務局長になったQであった。Qは幼稚園に入ったばかりの子どもがいるのに、泣きながら一生懸命やっている姿を母親Bは運営委員としてこれまで見てきた。彼女を助けてあげないとだめかなと思う。しかし、運営委員長となって行った市連は試練の場となる。母親Bは事務局長であるQにもまったくフォローしてもらえず、不安がいっぱいになる。K2子ども劇場をどうしたらいいとか考えられず、Qとも何を話したらいいかわからず、信頼関係も築けなかった。しかし、母親Bは、Qと泣きながらお互いの気持ちを吐き出す。Qも何をどうしたらいいのかわからず、不安の中にいたことがわかりQと少し歩み寄れた。また、前運営委員長と前事務局長にも話を聞いてもらったことで、こうしたらいいのだということが少しずつ見えてきた。母親Bは「目の前にやってくることに精一杯でわからないなら、とりあえずやってみよう、行ってみようと思った。」と言っている。

ここではさらに、母親Bが運営委員として子ども劇場のリーダーを担い続ける中での母親Bと三男の変化の連鎖をみていきたい。

母親Bは、大きらいなキャンプに再び三男と参加する。このキャンプは大雨のキャンプとなってしまふ。母親Bは、大雨の中、草ソリ遊びを考え、それをやってのける中高生らの力を目の当たりにする。子ども劇場は、普段できないこと、思いもつかないことをやるどころなんだと思う。そしてその活動を自分が支えていることに感動する。そしてその中の高校生指導員のRや中学生Sの頑張りにあこがれの目を向ける三男、来年のキャンプも行きたいと言う。母親Bが支えている活動の中で、母親Bもそこでの中高生の姿に感動し、また三男もその中高生に「かっこいい」とあこがれの目をむけている。ティーンズアートフェスティバルの取り組みでは、母親Bは、出演する4人の中学生の練習に必ず行くようにした。その子たちが活動しやすいように場所をとってあげて一生懸命知恵を出して練習を支えた。母親Bはただそこにいてだけで、何も言わないし、何もしない、ただその子たちに寄り添うだけだった。ティーンズアートフェスティバルの本番、悩みながらも本当に苦しんで練習してきた4人の子どもたちが、今まで成功しなかったところを成功させる。このとき、母親Bは初めて自分の子どもじゃない他人の子を心配したり思ったり、心を寄せる経験をする。自分が支え続けた子どもたちの姿に感動する。母親Bは、子ども劇場をやめないで、運営委員長として子ども劇場のリーダーをやめないでいたからこそ、この感動を経験できたと言っている。また、三男はいつも母親Bと4人の練習を見続けてきた。4人の中高生の姿を「かっこいい」という。そしてそんな三男の姿を見て、母親Bは三男もいつかの舞台上に立って欲しいと思う。これらの母親Bと三男の経験は、三男のこうなりたいという目

標である「意味ある他者」(紫野晶山)の獲得につながっている。

夫との対立とその克服 そして3点目は、母親Bが三男の課題を克服するために子ども劇場の担い手として自己形成し、その姿が夫とのジェンダー問題の解決の糸口になることである。母親Bは子ども劇場のリーダーを担うまでは、家のことや子どものことばかりをやっていたのに、子ども劇場のリーダーを担うようになってからは、朝出ていったきり帰宅は夜ということも多く、家の中はぐちゃぐちゃ、我が家はホコリ屋敷になる。また、初めてのティーンズアートフェスティバルの取り組みのときはしょっちゅう家を空けるので、夫が怒りまくる。「なんで夜そんなに出ていくのだ。うちの子は家に置いておいて。」と言われる。また、夫が口をきいてくれないときもあった。しかし母親Bは、子ども劇場の取り組みの中で、子ども劇場の中高生の活動を自ら支え、その姿を見た三男はそれの中に「意味ある他者」である目標を獲得してきたこと。三男はまだ小学生だけれども、いずれは中高生になる。そのときこれまで自分が支えてきた中高生のような活動をしてもらいたいこと、そして自分がK2子ども劇場の取り組みの中で支えてきた子どもたちの活動する姿を見るたびに、その姿とそれを目の当たりにしたときの喜びを夫に話していくようになった。母親Bは自分の子ではないK2子ども劇場の子どもに関わることで、その子のお母さんにはわからない成長を自分が見せてもらっている。そしてそれをその子のお母さんに伝えられる。また、自分以外のK2子ども劇場のお母さんたちにも、三男のいいところも悪いところも、自分が気づかないところを教えてもらいたい。また、ティーンズアートフェスティバルに出演した中学生の姿を見て、三男にも同じ体験をさせたい。母親Bはだから自分はそういう子ども劇場の活動を創るところにいたいのだという話を夫にする。そして三男が小学校高学年になるにつれ、夫の態度が変わってきた。母親Bは、ただ遊びに行っているわけではないということはわかってもらえたと思うと言っている。夫はホコリ屋敷の家に掃除機をかけるようになった。そして昨年、母親Bは夫に会員になって三男と劇を観てもらいたいと思い、自分の運営委員長としての仕事の内容も話した。夫はK2子ども劇場に入会して、三男と高学年の例会を観て楽しむようになっていく。母親Bが三男の課題を克服するために子ども劇場の担い手として努力していく姿に夫が共感したのである。

このように、母親Bは、三男の課題を克服する子育ての環境を獲得するために劇場の担い手として自らの困難をも克服し自己形成し、夫婦のジェンダー問題の解決の糸口も見つけ出している。

表2 K2子ども劇場 母Bと子どもの生活史 (2003.3～現在) 抜粋

	Bさん親子	2003.3	2003.1	2003.1	2005	2004.9	2004.1	2006.1	2006.7	2006.7	2006.7	2008	2008	2007.7	2007.7	2007.11	2007.1	2009	10月	2008.11	2009.7	
		母と子とをめぐり出される	初めと三男を観る	泥だの遊で遊びの初め	プロク長引ける	初め委員になる	始めての拡大	高学年と三男を観る	事務局長を打診する	しぶぶク長引ける	大夏のキャンプ	の雨のキャンプ	運営委員になる	市連は市試練	Qさん泣きながら吐き出す	夜の集まりに夫が怒る	ティーズトスバ	家は敷居が狭い	キャンプで三男と一男	わくわく	わくわく	再び委員を引き受ける
K2子ども劇場活動		例祭自動	会典・祭典「なんなんマン」	典「なんなんマン」			「Mr. Zoo」			「ヨモヨモ」							「龍の子郎」				「森生はてはて」	
		K2子ども劇場運営			プロク長引ける	初め委員になる					夏のキャンプ	の定期総会				ティーズト出演	大の太「龍の子郎」	夏のキャンプ		大の太「森生はてはて」	定期総会	
		出会った人たち					市連の人たち		PさんNさんQさん	R君やS君	前事務局長Qさん			Q		R君が出演した4人			青年U君			
子	三男	三男が自食うようになっているの。	泥だの遊で遊びの初め	目を測る「おんん」				予想を反す			R君S君の二重奏					いっしょに君が4人かいて		火もなきにきく	水爆参加			
母B		三男が自食うようになっているの。こに居るんだ。	泥だの遊で遊びの初め	目を測る「おんん」				予想を反す			R君S君の二重奏					いっしょに君が4人かいて		火もなきにきく	水爆参加			
夫																					入会する	

注)例会・祭典は、演劇、人形劇、コンサート等である。自主活動は「あそび会」とキャンプ等である。

結語

1) 子ども劇場を担う二人のリーダーが獲得している世界

ごく普通の母親が、子どもと共に子ども劇場の舞台芸術に出会い、目の前で展開される、まさに唾が飛んでくるほどの間近かきの舞台（子ども劇場ではそれを「生の演劇」と言っている）に感動して、子ども劇場との関わりを始めている。その劇場の担い手になってこれを支えていこうとする時、民間の地域子ども文化運動としての特徴を持つ取り組みは、一筋縄では進めていくことのできない難しい課題に直面する。それは、地域に豊かな文化を育むことの、新たなものを創造することの、そのために人々の共同の関係を築き上げることの難しさである。

しかしこの報告で明らかになったように、二人のインフォーマントは、その困難をいくつかの感動と、人と人の豊かな共同の関係を紡ぎだすことで乗り越えている。この母親たちが獲得している世界はいかなるものであろうか（ここではそれを生活史研究の、「生活世界」を意識した用語として「世界」としている）。

2) 子どもの豊かさを発見する母親たち

第1に、子ども劇場の取り組みのなかで、わが子の持つ可能性と豊かさを発見していることである。Bの三男が、舞台芸術の魅力に取りつかれるかのように、愛着を持った経緯にその典型がある。

第2に、舞台芸術の持つ可能性は（報告者集団はそれを驚きのなかで発見したのであるが）、Aの長男に典型的に示されていた。5歳の時に観た舞台の展開を、18歳の彼が詳細に説明したことであった。彼にとって、舞台への愛着は、その主人公の生きざまへの共感と共にあった。大人への入り口に在る彼は、舞台との出会いを、そこで感じたものを表現する力量がついたと語っている。なるほど、そのことの意味を把握し、思考し、判断して、自分なりの見解を持つ。それを他者に語るができる。その力が、舞台に感動し、その世界を自らの心の中に創造し、その世界を練り上げながら、舞台の主人公に共感していくことを可能にしている。そのようなことなのだと考えさせられたのであった。物事を認識する能力とは、学校における授業によって、知識の体系を身につけることによるのみ可能となると考えていたが、このような経験を伴ってこそそれは本物になるということではないのかと考えさせられたのである。

第3に、A、B双方に共通していたことであるが、単位の子どもの劇場のリーダーとして自主活動（「お遊び会」や「キャンプ」等）に取り組んでいく際に、その指導を担当している青年、高校生、中学生のリーダーとの心あたたまる経験をしていることである。はじめは受け入れてもらえないかのように感じ、疎外感を持っているが、雪にうずもれさせられる経験をしたAに示されるように、感動的に彼らとの出会いを受け止めているのである。そしてその経験は、青年、高校生、中学生のリーダーの持つ力量の発見に繋がっている。Bが嫌いだっただキャンプを導かなければならなくなった際に、しかし大雨で企画が台無しになろうとしたが、若者の機転で「大雨のなかの草ソリ」遊びを考案することでこれを切り抜けた経緯にそれが典型的に示されている。ティーンズ

アートフェスティバルで活躍するお兄ちゃんを羨望の眼差しで見つめていたBの三男の経緯があるが、青年、子どもたちが自らの力量を大きく乗り越える力を発揮しながら思いを表現しているところに多くの人々が感動し、その感動が、演じた彼らを感動させている。若者が光り輝きながら成長していくひとこまである。

第4に、そのように説明できる子どもや青年の表現力の豊かさに出会う子ども劇場の世界である。

3) 困難を乗り越えることで獲得される力量

では、続けて「困難を乗り越えることで生み出される力量」という視点から、この母親たちが獲得している世界を検討してみよう。それは大きく2つある。

1つは、子ども劇場の運営委員、委員長、そして事務局長などとしてその運営を担っていかうとした時、自らの主体性や生き方、人間的な力量が問われることである。例会や祭典での舞台を経営しようとするれば、まずはその財政を担うことから始まって、相当大きな重みを背負うことは、容易に想像できる。それ故に、12の子ども劇場をネットワークする組織での会議（「市連」）では、正確な説明と厳しい決断や判断を求められよう。それをインフォーマントA、Bは、「市連は試練」と語って笑っていたが、その明け透けな大らかさが子ども劇場のリーダーの特徴でもある。筆者小林の印象では、彼女等は、しばしば大声で笑う、心の底から大声で笑う。そのように笑う姿を最近あまり見なくなった。屈託のないおおらかさ。そんな心意気を持つ彼女等のエートスは、Bが語っていたように、単位の子どもの劇場の、その人間関係のぎこちない2、3人のリーダーたちが、結局はとことん語り合うことで、強い絆を生み出していく経緯に秘密があった。課題の重みは、強い絆をつくることなしには乗り越えることができない。その母親どうしの絆を生み出すものは、子ども劇場に生まれるわが子とわが子に連なる地域の子どものたちの光るような可能性の発見であり、その人間的な力への確信である。

ここに、母親どうしの共同、母親どうしと子ども・青年どうしの共同、そして母親とわが子との新しい共同が生み出されている。それは、家庭と地域で共に生きる新しい関係の創造なのだといいたい。

2つは、以上のような経緯に共感できない夫との間に生まれる困難である。大方において夫は以上のような経緯を知らない。そして母親もその豊かな経験を夫に語っていない。しかし、AもBも子ども劇場のリーダーとしてその取り組みに大きな確信を持ち始めている。ならば、夫婦はこれからいかなる関係を築き上げていけばいいのか。そのことが切実に問われるのである。その困難は、まず子育てにおける母親の「孤立」として見えて来る。夫にしても、「こんなはずではなかった」と思うであろう。専業主婦である妻が、自分の世話をできない状況にある。それはなんでもやってもらえた男としては、苦痛であろう。家庭における夫の「孤立」である。関係の冷えた親をみる子どもたちの心もまた「孤立」している。このように、子ども劇場のリーダーを担えば担うほど家庭の構成メンバーの関係が孤立化してしまうのかもしれない。

感動的なのは、AもBも、この関係を乗り越える筋道のなかで今日を迎えていたことである。すでに詳細な説明をした通り、二人の夫たちは、家庭の中での激しいやりとりを繰り返した後、相互に歩み寄る努力をしている。その際、けなげなのは夫である。Aに典型的なように、「かわいい長女」もまた子ども劇場の取り組みを担う母の生き方を支持し自分に迫ってきた。そこで自らが問われたものは、家庭のなかにあって、人間としての自立した姿をいかに生み出すかである。夫婦間にあるジェンダー問題は、このように重たい課題となり、その経緯のなかでは二人の関係が危ない状態にもなるかもしれない。しかしこのインフォーマントA、Bに典型的に示されるように、豊かな出会いと感動を持つ女性の生き方は、ゆるぎない確信を生み、ジェンダー問題を抱える夫をも変えていく力量を生み出しつつあるのである。

4) わが子と共に探り出す自立への道

子ども劇場を担う二人のリーダーが獲得している世界を、「子どもの豊かさを発見する母親たち」、「困難を乗り越えることで獲得される力量」という視点から整理した。

AもBも、子ども劇場の担い手になることで、地域の母親どうし、子ども・青年どうし、そして母親とわが子との新しい共同関係をうみだしている。それはさらに、母親とわが子と夫との新しい共同を生み出す力にもなりつつあると捉えることができる。

ここでは、子ども劇場の担い手になったところから今日までの限られた時間の範囲を生活史研究の手法を用いて分析してきたが、そこに明らかとなったものは、子育て期後半にある母親としての日本女性の自立を探り出す歩みであり、一女性の、地道で力強い自立への筋道であった。インフォーマントA、Bにあっては、その筋道とは、わが子と夫と共に思考錯誤しながら歩く生活のなかであり、自分とわが子とが地域のなかで地域に働きかけつつ生きる筋道の中にこそ形成されるものであることが明らかである。

資料2、単位子ども劇場K1の組織と活動

1. 目的

K1子ども劇場は、鹿児島市のJ地区に在住の児童文化を愛好する子ども大人の自主的な会であり、事務局を鹿児島市Bにおいている。その目的として規約には、

「この会は、子どものために優れた芸術を鑑賞し、地域の子どもたちの文化の創造・発展に努力します。それを通して子どもたちの感性・友情・自主性を育み、健全な成長をはかります。」とある。

2. K1子ども劇場の組織

K1子ども劇場は、Aブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロック、Eブロックとそれぞれ小学校区ごとにブロックわけがされ、合計5ブロックで構成されている。それぞれのブロック

別の会員数は、A 57名、B 102名、C 101名、D 91名、E 65名であり、合計416人である。(2009年6月14日現在)

組織としては、会の長として運営委員長があり、会計や例会の実務を担当する事務局長、そして運営委員として、乳幼児(0歳から3歳)の活動を担う乳幼児部長、低学年(4歳から小学校3年生くらい)の活動を担う低学年部長、高学年(小学校4年生くらいから中学3年生)の活動を担う高学年部長、高校生から青年の活動を担う青年ブロック長、そして地域で開催する芸術祭典の準備を担う祭典部長がいる。青年ブロック長は、会員の青年が担うが、運営委員は会員である親が担っている。

また、ブロックは、サークルと呼ばれる会に分けられ、会員同士つながりがある親子の、または住んでいる地域のサークルに所属し、サークルの中にブロック会に参加しサークル会を定期的に開くサークル委員と、サークルをまとめるサークル長を一人ずつ置いている。また、乳幼児部は乳幼児サークル、高校生・青年は青年サークルがそれぞれある。

ブロック会は各ブロック別に月に一度くらいの割合で開催され、これからある例会の情報や、自主活動の情報、それぞれの会員の様子や地域の様子などが話される。

また、サークル会は、各サークルごとにやはり月一回くらいの割合で開かれ、ブロック会で話された内容の伝達のほか、これからの活動内容の確認、各会員の様子や学校の様子、地域の話題、そしてそれぞれの子育ての悩みまで、いろいろなことが話される場となっている。サークル会の開催率は、乳幼児サークル100%、低学年サークル94%、高学年サークル70%である(2009年5月)。

3. 活動内容

K1子ども劇場は、今期(2008年度)すべての子どもたちが平和で心豊かな生活を築く人間として成長できるように、地域に根ざした豊かな活動をつくり、子どもも大人も育ちあえる取り組みを目指して活動してきた。それぞれの活動内容を見ていく。

1) 乳幼児部の活動内容

①サポーター講座を生かした会員主体の遊び会

鹿児島県子ども劇場連絡協議会では、乳幼児部の会員や子ども劇場の担い手の単位劇場の運営委員を対象に、サポーター講座を開催している。その講座で学んだわらべ歌遊びなどの遊び会をサークル会、遊び会で行った。また、遊び会としては、会員みんなで協力して準備するなどして絵本の読み聞かせなど月一回行っている。

各月に開催された遊び会の内容は、6月カラーセラピー、7月七夕作り、9月ぶどう狩り、10月幼児安全法講座、11月リズム体操、12月クリスマス会、1月凧作り、2月豆まき、3月いちご狩り、お花見・シャボン玉遊び、5月こいのぼり作りである。

②乳幼児例会

- ・9月むじよか劇場「いないいないばあ」

今年から始まった認定サポーターによる例会。日頃見覚えのある会員さんが役者さんになっている！という感動もあり、わらべ歌で構成された例会だったので、ゆったりするやわらかい雰囲気につつまれてた例会だった。

- ・12月風の子九州「ぴーかーぶー」

円形の舞台をぐるりと取り巻いて鑑賞する例会。わらべ歌、布あそび、劇遊びで構成され、心のゆりかごを見えるようにした作品。乳児から幼児、お母さんたちがゆっくりくつろぎ、優しい笑顔になる作品だった。

- ・2月劇団クラルテ「モンモとパンボはいつも一緒」「ポッケのワンピース」

二本立ての人形劇。子どもたちはかくれんぼする人形やポケットに次々入っていく動物たちに目を輝かせた。

2) 低学年部の活動内容

①自主活動（低学年部またはブロックごとに開催）

- ・7月お友だちキャンプ

6月にキャンプの説明会を開き、キャンプまでの取り組みとして指導員を含めた話し合いを開き、一泊二日のキャンプを宮川野外活動センターで行った。

- ・8月川遊び、デイキャンプ

岩屋公園に川遊びに行き、錦江湾公園ではデイキャンプを行った。

- ・9月三宅美術館見学（地域にある美術館見学を行った。）

- ・10月布染め遊び会 11月パン作り遊び会 12月お楽しみ会

例会「森は生きている」で入会してくれた新会員のために劇場を知ってもらおうという意図で企画した。読み聞かせ、リクエストお絵かき、バルーンアート、ピアノの連弾、リコーダー演奏、歌やダンス、剣道の素振りなどバラエティーに富んだ内容で楽しい時間だった。

- ・各例会の後の合評会

ブロック別に、例会を観た後に合評会を開催した。合評会を開くことによって、子どもたちは自分の意見を言えるようになっていく。

②低学年例会

それぞれ例会の前には事前学習会、ワークショップ、例会のための遊び会などがある。

7月「たかはしべんコンサート」 9月劇団うりんこ「星のまつり」

11月劇団仲間「森は生きている」 2月日本音楽研究所「海賊ラティーナ参上」

5月劇団プーク「すてきな3人組」

3) 高学年の活動内容

①自主活動

K1子ども劇場の分割を視野に入れた子ども集団づくりを各ブロックごとに大人の責任者をたて、子どもの活動を支えながら、子ども同士、親同士のつながりを深めていこうとしたが、その取り組みはブロックにより偏りがある。

中学生グループは、市内団中学生交流会、高学年祭典のそれぞれの取り組みが出来た。青年ブロックは、3月から高校生が14名増え、地域ごとに3つのサークル分け活動が始まった。K1村（10日間キャンプ）の指導員として、そしてティーンズアートフェスティバルの出演者、裏方の実行委員として活躍した。

②高学年例会

それぞれ例会の前には役者さんや劇団のスタッフとの事前学習会、そして例会当日の役者さんとのロビー交流会、例会後のサークル会での感想会がある。

7月「たかはしべんコンサート」 10月劇団サダリ「時計が止まったある日」

11月劇団仲間「森は生きている」

2月日本音楽研究所「ラテン仕掛けのコンサート」5月青年劇場「風が吹くとき」

③ティーンズアートフェスティバル（日時2009年11月8日）

目的 自分を表現できる中高生の集団づくり

目標 全劇場、集団で参加する

K1の参加者数 10名

6月の立ち上げ式では、他劇場と交流しながら「最高のステージにしよう」と決意を新たにした。今回の取り組みはK1劇場の分割を前に、出演者をバックアップする中高生を中心とした子ども実行委員会と高学年を中心とした大人実行委員会の動きを作った。

取り組みの中で、中高生の交流が深まり、子どもの活動を支える大人の交流が深まることを目標とする。

4) 祭典部の活動内容

①祭典

3月4日から8日にかけて6ステージの演劇鑑賞会の開催に取り組んだ。ステージごとのチケット販売、チラシ、ポスター、チケット作成も各ステージごとの実行委員会が行った。実行委員会は大人実行委員会、子ども実行委員会が各ステージごとに作られて、実行委員会が定期的開催され、会員同士のつながりを深めながらの動きを作り出した。

各ステージでの鑑賞者数は、A(141名) B(139名) C(56名) D(96名) E(108名) F(156名)であった。

鑑賞した作品は、劇団風の子九州の「どんぶらこっことんどこ亭」である。アジアの楽器を使った演奏と親しみやすいメロディーで、アジアの昔話、遊びがテンポよく演じられ、年齢に関係なく楽しめた。また、公演後、劇中にてでてる「フィーフィー」という風車を劇団の方の指導で作るワークショップはとても好評だった。

②高学年祭典

C中、E中の2ステージをそれぞれ高校生の実行委員長を中心に、中学生、高校生の実行委員体制で取り組む。8月には韓国への下見から始まった取り組みに、子どもたちは何度も集まって頑張って取り組んだ。そのおかげで、目標観客数260名に対して、294名を達成し、子どもたちも連帯感や達成感を味わうことができた。

鑑賞した劇は、劇団サダリの「時計が止まったある日」

(出典：K1子ども劇場内部資料より研究集団が作成)